序

昭和三十六年一月平城宮跡においてはじめて木簡が発見されて以来、発掘調査の進行にともない現在までにその数は二万二千余点に及ぶに至った。木簡が古代史研究はもとよりさまざまな分野における新たな史料として貴重な価値を有することは今更言うまでもない。当研究所においては保存困難な木簡を永く後世に伝えるための科学的研究に着手し今日ほぼその目安をつけることが出来た。他方木簡自体の整理ならびに調査研究について全力をあげてこれに従ったことはもとよりである。

更にこの貴重な史料を写真として保存するとともに広く活用されることを願って完全な記録の公刊を企画し、昭和四十四年第一冊を刊行した。その後諸種の事情から遷延したが、ここに漸くその第二冊を刊行するはこびとなった次第である。しかしながらこの二冊に整理収録したものは、まだ今日まで発見されたものの二割に充

たず、年々増加する新出木簡を考えるとき正に茫洋の感がある。発見された主要なものについては逐次、年報や木簡概報によって発表しているが、今後も休みなく完全な記録の刊行を目ざして鋭意努力する所存である。

平城宮跡以外においても木簡の発見が相つぎ、その史料としての価値が益々高まりつつあるとき、この刊行が木簡の綜合的研究の推進のための一つの契機ともなることを願うものである。

終りに御繁忙中を本書刊行のため御指導御協力いただいた方々に対し心から謝意を表するとともに今後の御支援を心からお願いする次第である。

昭和四十九年十二月

奈良国立文化財研究所長
小川修三